

「問いかけ」～酪農家自身が目標を認識し、より主体的に取り組み始めるためのサポート～

湘南家畜保健衛生所

島村 剛	仲澤 浩江
橋村 慎二	松本 哲
高山 環	矢島 純夫
原田 俊彦	草川 恭次

はじめに

従来、我々は、農場の生産性向上を図るため家畜保健衛生所（以下、家保）から農場へ主に一方向的な技術指導を行ってきた。しかし、それだけでは取り組まれない、また改善されない農場も少なくない。そこで今回、牛白血病（成牛型。以下、牛白血病）対策の中でも具体的に改善される事の少ない初乳対策を例に「問いかけ」を主体とした手法で改善を図ったので報告する。

問いかけを主体とした改善への流れ

牛白血病の主な対策には①感染牛を陰性牛群から離す②注射針・直腸検査手袋の使い回しはしない③吸血昆虫対策④初乳対策（加温、冷凍。但し、牛白血病抗体陰性牛の初乳給与が難しい場合）等がある¹⁾。中でも初乳対策は、子牛への感染リスク低減に効果的な対策の一つであるが、農場では「手間がかかる」「時間がない」「面倒くさい」等の理由から具体的改善に向けて実施されることの少ない対策の一つであった。

そこでまず、対策の話しをする前に①牛白血病そのものをより深く理解してもらう事②対策を進める為の目標を明確化してもらう事が必要と考えた。そして、それらの点をより効果的に進めるため全体的な流れを「準備」「問いかけ」「目標設定」と大きく3段階に分け、実施することとした。

準備～場の設定～

「問いかけ」で最も大切な事は、農場自身の口からできるだけ多くの発言をしてもらうことであった。その為、聞き手（家保）として特に配慮した点は「リラックスして何でも自由に話せる場作り（場の設定²¹⁾）」であった。その為には、基本は楽しく。立って話すより座って話す。日差しや気温、空間配置等座る場所への配慮。そして、雑談は、農場の緊張を解きほぐし、自由な発言を引き出す（これをアイスブレイクと呼ぶ）ための大切な要素として重要視した。また、農場が忙しいようであれば、話しはせず、出直すこととした。こうして「場の設定」が出来て初めて、問いかけに進む事とした。

問いかけ～ある日の再現～

以下、現場での問いかけの様子をコメントを加えながら再現する。

家保)「白血病って何ですか」

そもそも牛白血病とは何なのか。まず、根幹的な部分について家保から説明するのではなく、問いかけをすることで農場自身に考えてもらった。

農場)「何だったっけ？癌だったよなあ」

家保)「白血病になって困る事ってありますか」

農場)「伝染病、と場で全廃棄、ひどいと死ぬ・・・といった事かなあ」

家保)「それって本当に困る事ですか。もしかしたら生涯発症しないかもしれませんよ」。

この病気は感染してから発症まで期間の長い疾病である。ここでは病態について逆説的に問いかけることで更に深い思考を求めた。

農場)「う～ん。あとは預託に行けなくなるなあ」

家保)「そうですね。では他には？」

農場)「ほか？う～ん」

家保)「例えば、今後、消費者への風評被害などはどうですか？」

問いかけ中、聞いていて不足と感じられる点については所々補足した。

農場)「なるほど、今後どうなっていくかわからないな」

ここでは前述の問いにより、農場だけの問題から消費者を意識した問題に変化している。

家保)「では、白血病の原因はなんでしょうか」

農場)「何だったっけ？ウイルスだったかな？」

家保)「そうですね。では、どのように感染するのでしょうか」

農場)「えーと。直検手袋、注射針の使い回し、吸血昆虫・・・」

家保)「ほかにはどうですか？」

農場)「あと初乳なんかもだな」

家保)「初乳は、どうしたらいいと思いますか」

農場)「そうだな。温めるか、凍らせればいいんだっけ？」

家保)「そうですね。では温めは何度が良いと思いますか」

農場)「えっ。温度？う〜ん・・・。40度くらいだったかな？」

家保)「惜しい。文献では56℃30分以上と言われていました」

問答中、このような場面で獣医学的知見つまり獣医師が必要となる。

家保)「要は、原因となる感染リンパ球が物理的に伝播しないか、加温等で壊ればよいのです」

引き続き白血病対策の基本的な考え方を説明した。ここでは細かい話はせず、要点のみ伝え、決して難しい話ではないんだという意識を持ってもらうよう心掛けた。

農場)「そしたら初乳は、鍋で煮たり、電気ポットで沸かしてみようかな」

ここでは農場が、自由な発想をしてくれている。しかし、初乳は温度が高いと固まってしまう為、鍋で煮る場合は温度管理が重要である事、また電気ポットは、その多くが一旦沸騰した後、保温に移行すると言った情報を伝える必要が生じている。これについて聞き手としてどのように対処すればよいか。ここでは次のように対処した。

家保)「なるほど。あとは適切な温度管理と維持の問題ですね」。

そのまま受け止めた。農場の発言は批判厳禁とした。「それじゃ駄目ですよ」というような言葉は、そのまま農場の自由な発想、意欲を奪いとってしまう。互いの自由な発想の中でアイデアを連鎖させ合い、今後の対策を一緒に考えていきましょうという想いでつなげた。

これらも含め問いかけでは次の4つの約束事①批判厳禁②質より量③自由奔放④連鎖反応を基本に常に意識しながら進めるよう心掛けた。

家保)「では、どうすればよいか」

ということで平成18年度神奈川県業績発表会で東部家保から発表された温度制御付き投げ込みヒーターを利用した安価な初乳加温セット³⁾を提示した(写真1)。

農場)「何これ?何これ?」

珍しい機械セットの為、農場ではとても興味を持ってくれるとともに、実際機械に触れてもらうことで現実的に対応可能な話であるということを実感してもらった。



写真 1 安価な初乳加温セット

家保)「何だと思えますか?」。

ここでもすぐには答えず問いかけた。そして、その後も実験当時の様子(試験データ結果等も含む)も同様に問いかけながら進め、初乳の加温についてより深く考えてもらった(写真2)。

そして最終段階である目標設定に進んだ。



写真 2 機械セット提示した時の様子

目標設定～目標の明確化～

家保)「今後どうしましょうか」

対策実行にあたっては、その途中で意欲の低下、断念する事のないよう農家自身による目標設定が重要な事と考え、明確にしてもらった⁴⁾。ただ、目標達成に向かって進むイメージがしにくい面もあるため、図1～4のようなイメージ図を書いて説明する事もあった。

家保)「現在をゼロ、目標達成時を100とした場合、果たしてここ(図1。グラフ内)には、どのような線が書かれるでしょうか」

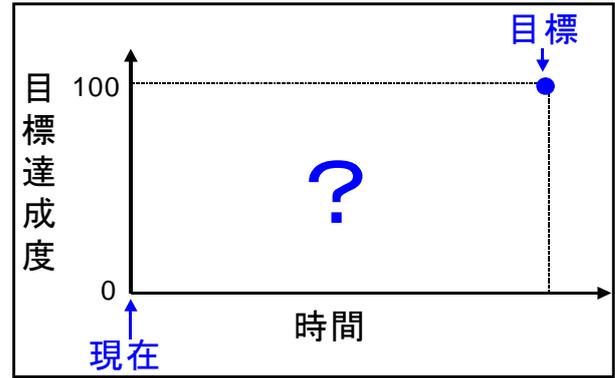


図1

家保)「この図のように普段何も検討していない中で、ある日突然、目標が達成するということはありません(図2)」

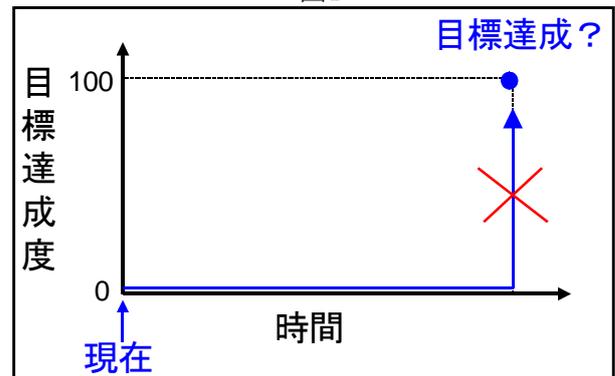


図2

家保)「毎日少しずつ何か目標に向かって行動をしていく事で必ず目標は達成できる。

ただ、いきなり高い目標では、途中でやらなくなってしまうので、まずは当面の目標を決めて、そのために今、一体何ができるのかという事を考えましょう(図3)」

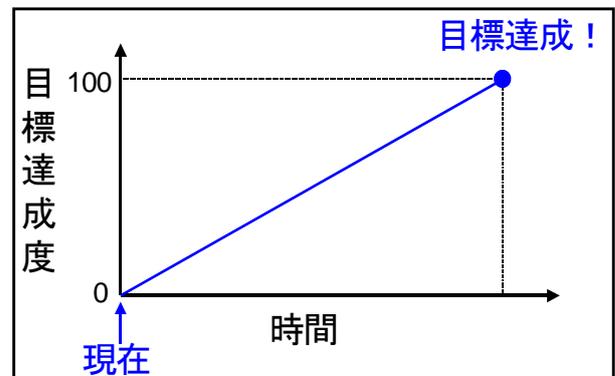


図3

その結果、白血病で悩む多くの農場では、当面の目標として預託検査に全頭合格させるという目標を掲げる事となった(図4)。そして更に「ではどうしたらその目標は達成できるのか」農場に考えてもらった。

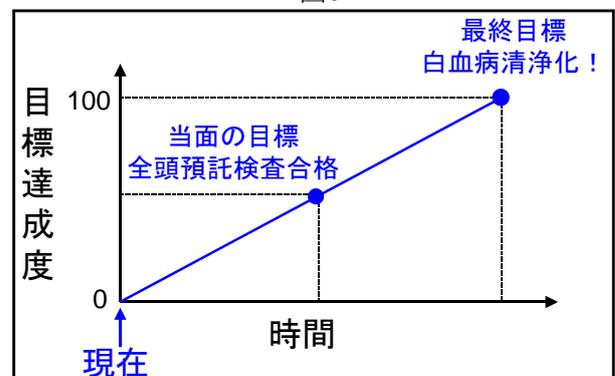


図4

農場)「××はできないけど、〇〇ならやってみようかな」

このような一連の話の中で複数の農場において自分の経営に合った初乳対策が始められた(写真3)。

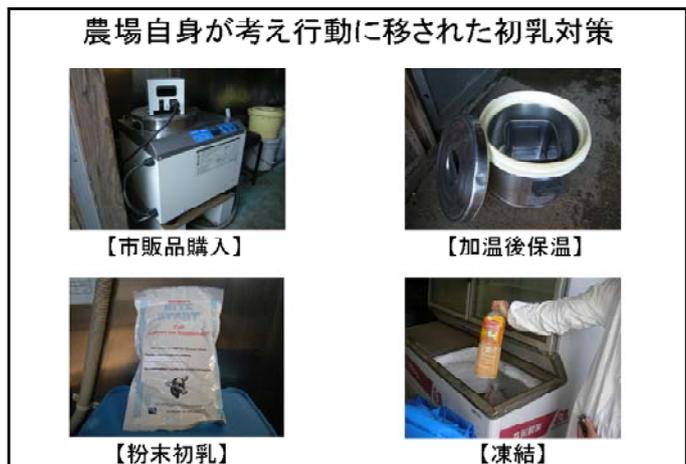


写真3 主な初乳対策例

また、中には加温器を自作した農場もあつた。この農場では移行抗体消失後とされる6～12ヶ月齢未満の育成牛を対象に白血病抗体検査を実施したところ、加温対策前36%であった白血病抗体陽性率が、加温対策後は0%となり、現在までのところ全頭預託検査合格という当面の目標をクリアしている(写真4)。

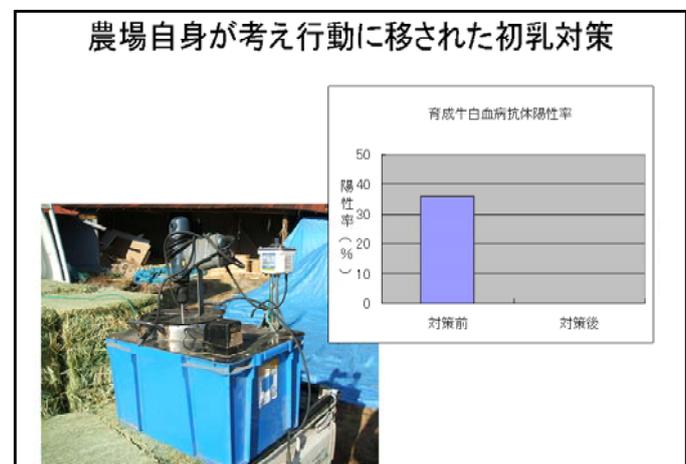


写真4

他にも、我々が帰った後すぐに加温実験をしたり、問題の整理法として紹介したKJ法⁵⁾をすぐに自分で実践された方もあつた(写真5)。ちなみにこの加温実験は湯煎温度が高く初乳が固まり失敗してしまつたが、この失敗が次の初乳対策へのステップとなっている。

これらのように農場自身が実際に考え、行動に移していただいたという事が、一番の喜びであつた。



写真5

また帰り際、最後に当所で作成した白血病クイズ⁶⁾をやってもらった。このクイズは、問題をその日問いかけた順番に並べ出題しており、多少砕けた回答を散りばめながら、楽しくおさらいができるように配慮した(写真6)。

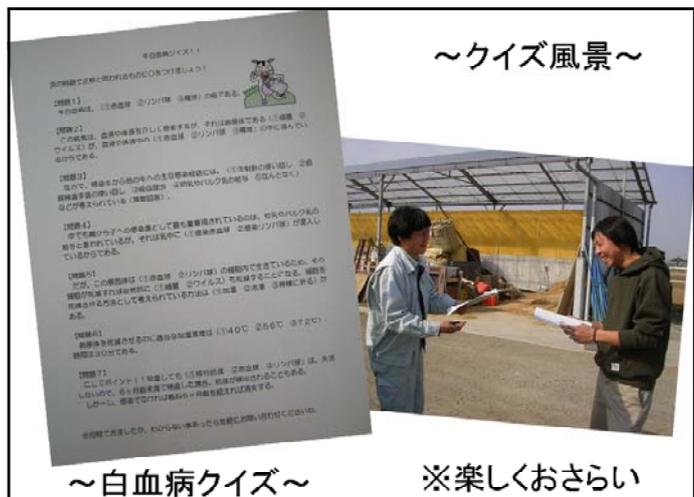


写真 6

まとめ

問いかけは課題から解決法まで農場自身が考え、そして決定してもらおう双方向的手法である。これは参加型手法^{7~8)}と呼ばれる手法理念に基づき実施した。その理念は「指導」より「支援(サポート)」が相応しく、全ての決定を農場自らがすることで主体的意欲向上が図られる。

農場の生産性向上を図るには農場の主体的意欲向上が必須である。今後、我々は従来の指導法に加え、参加型手法を始めワークショップ^{9~12)}、コーチング¹³⁾、ファシリテーション¹⁴⁾といった主体的意欲を向上、促進するための様々な手法を取り入れ、農場を支援していくことが、個々の経営向上、ひいては更なる畜産振興につながるものと考えている。

引用文献

- 1)小沼操：B L V伝播とその清浄化、臨床獣医、22 (3) 15-19 (2004)
- 2)堀公俊、加藤彰、加留部貴行：チーム・ビルディング、日本経済新聞出版社 (2007)
- 3)藤澤知枝ほか：平成18年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録 (2006)
- 4)原田隆史：夢を絶対に実現させる 60 日間ワークブック：日経 B P 社 (2007)
- 5)川喜多二郎：発想法～創造性開発のために：中公新書 (1967)
- 6)赤堀侃司ほか：授業を効果的にする 50 の技法～F D 研修の時代に向けて：アルク (2007)

- 7) 宗像朗：続・入門社会開発～P L A：住民主体の学習と行動による開発：プロジェクトP L A
編、国際開発ジャーナル社（2003）
- 8) 石井一功：やる気を引き出す参加型手法物語：全国畜産支援研究会（2008）
- 9) 門平睦代：ワークショップで主体性を育てる～ワークショップ型講習会が生まれた背景：臨床
獣医、25（5）、8-11（2007）
- 10) 堀北哲也：獣医領域への参加型手法・ワークショップの応用～生産者の主体性を引き出すために
：臨床獣医、25（5）、12-17（2007）
- 11) 島村剛、青木稔、堀北哲也：A牧場でのスタッフ集会の事例：臨床獣医、25（5）、23-25（2007）
- 12) 中野民夫：ワークショップ～新しい学びと創造の場：岩波新書（2001）
- 13) 岸英光：エンパワメントコミュニケーション～自分と相手の本当の力を引き出すコミュニケー
ションの技術：あさ出版（2003）
- 14) 名倉広明：ファシリテーションの教科書、日本能率協会マネジメントセンター（2004）